



覺めたる歌



金子集
女子集
二七



覺めたる歌

金子董

本間文庫

文庫 14

D 101





3



歌るため覺

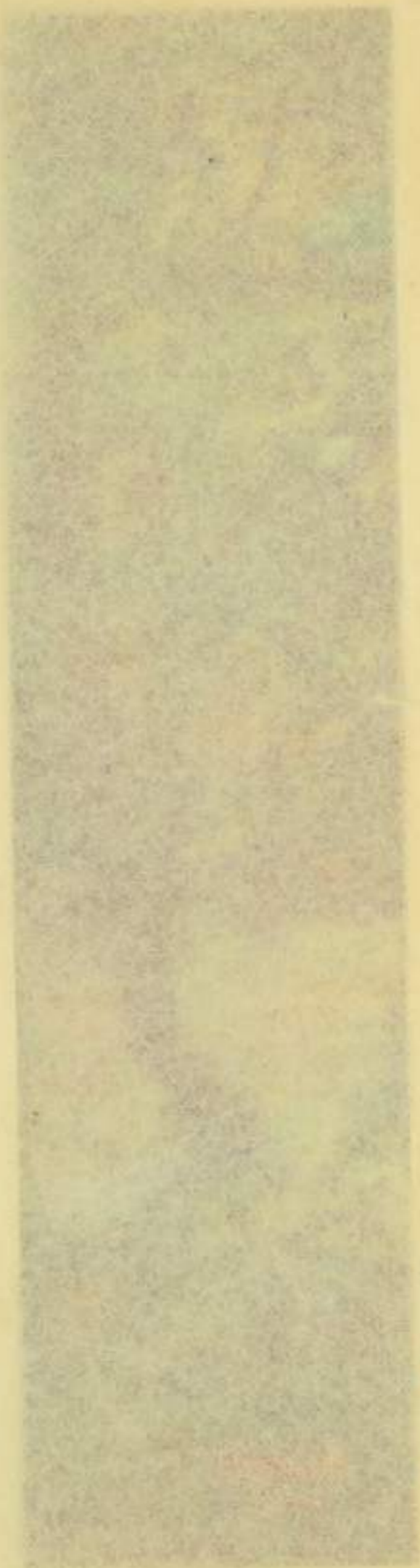
作園薰子金



版藏堂陽春



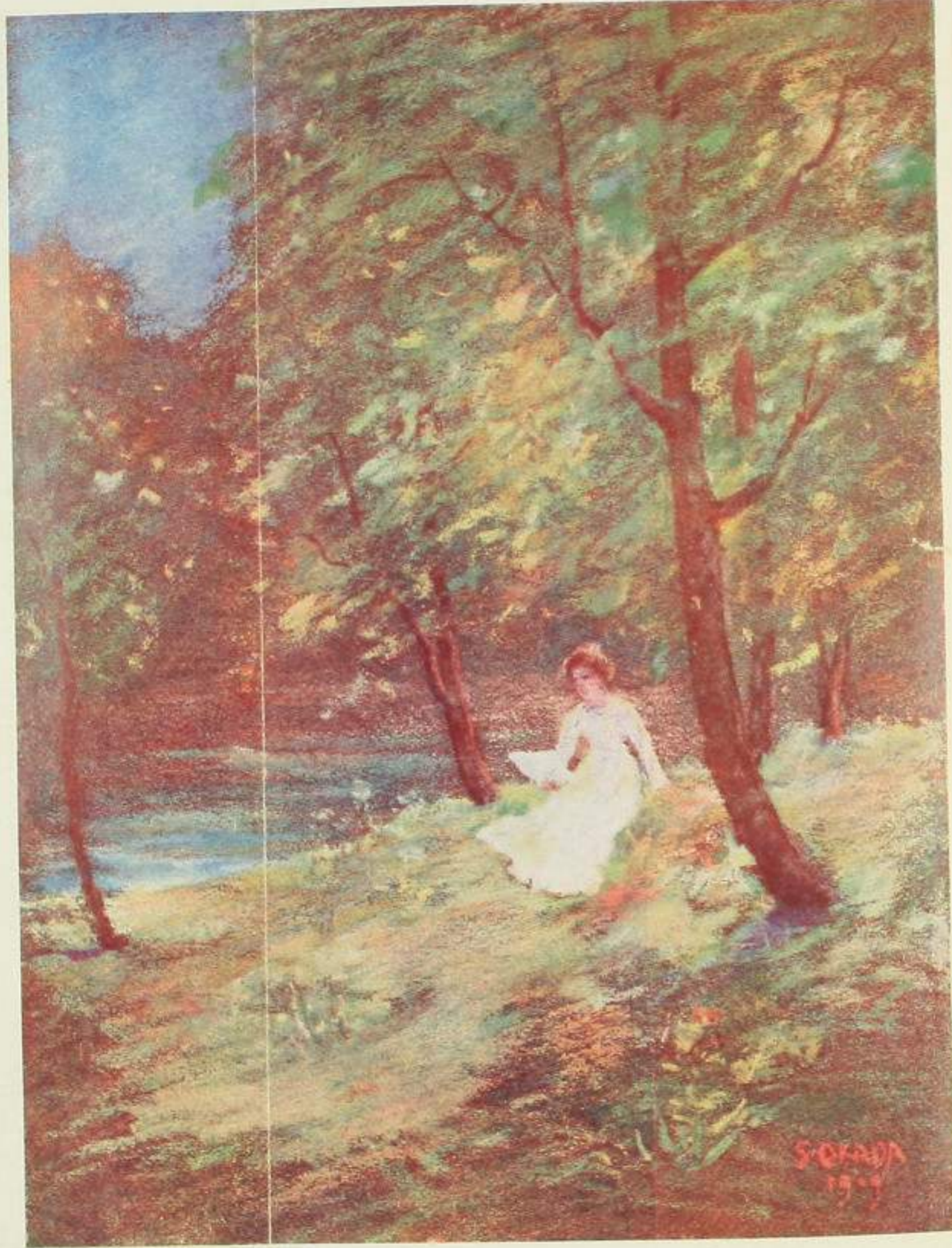
文庫4
D101



210



東洋印刷株式會社印行



岡田三郎助畫

東洋印刷株式會社印行

この書を友人佐藤橘香君に呈す

覺めたる歌

薰園

新しきわれを見いでしとある日に覺めた
る歌をうたひつゞくる

ゆたかなる春の光りの照るところ、生れし

地のひろきをおもふ

流れくる軒の木の間の春の日にこゝろひ

まなく野べにゆくかな

しづやかに梢わたれる風の音をきゝつゝ

冷えし乳を啜りぬ

忘れえぬ人なり、されどなつかしき聲のひ

びきの消え去りにけり

無花果の青き果かめばなぐさまるものう

きことの夕まぐれなど

夜ふけて藁灰におくぬくもりの静かに消

ゆるほどをおもひぬ

やはらかにかなしき春のおとづれぬかの

わか草の青のいたまし

沈丁花春のゆふべの庭の面に冷たくにはほ

ひひろごりにけり

風落ちし夕野に立てば足もとの草冷やかに露のおきける

帆をあげてわがゆくさまを秋晴の瀬戸内海におもひ浮べぬ

織き月ひかりを帯びて来るほど多摩川べりの黄昏に立つ

秋の日のあかるき空のもとを行く人あらはにも小さなるかな

武藏野の風の夜に来て落葉のさびしき音
をきつづくしけり

高原やさまよひくればたのしまず二夜ね
て去る秋風の中

庭の面の青の本草はこもりあひ夕さりく
れば濃き陰をなす

風遠くおとなひ来る如くにも林の夜の沈
みかへれり

海越えて安房の國よりひと籠の枇杷ぬれ

来る雨そぼふる日

淡き酸味病人こそは吸ふべけれ、かくおも

ひつゝなほも枇杷吸ふ

その中の青きを吸うてやゝ強き舌の刺戟
をよろこびにけれ

雨の日の室にちらばる枇杷のたね、哀しき

ごとを切りにおもふ

霧のふる遠かた野への青の樹々かのしづ
けさをおもひえがたし

春の夜の二階の隅の明り取り、うすくあか
みて月出でにけり

椿の樹、いたるところにくれなるの花叢を
なす伊豆の大島

夕風の波うちぎはのひたくくにさびしき
ことをおもひつゞくる

春の夜のあかき灯かけに白魚しらうをの冷つめたき色
をかなしみにける

壺焼のさゞえの煮汁ことくく吸ひたる
あとの穀かちはならべり

青草のかをりに寝ねてわかき日をおもふ
に何のおもひでもなし

草淡く青める野べに今日もまた志きりに
春の流るゝを見ぬ

わがこゝろ荒む時あり君われに青き果このみの
汁を吸はしむ

朝の風、椿の花のつゆわたる外のるづけさ
をひとりおもひぬ

煖あつ爐ろのほとりに置けばさふらんの花よみ
がへる氣息いきのおぼゆる

年こゝにきはまる暮の空の色しみぐも
のゝあはれなるかな

冬の日はまともに照れり、今しわれ林をい
で、ひとり仰げる

乾きたる空夕ちかきかなしみに、ことさら
落葉ふみて歩めり

七年の御忌は來ぬ、あゝ祖母よ弱かりし子
は生きてありけり

こゝろありてわが家をめぐり降る如くこ
の夜の雨の暖かきかな

春寒き黄昏がたの一室にむかひの窓の灯
のあかく來ぬ

ありし日の哀しかりけるかずくのひと
夜の雨に湧き來るかな

今朝の空、季節の代りのいちじるく眼にこ
そ見ゆれ九月となれり

見あぐれば空には星のちらばれり、人憩ふ
べき時をあゆめる

はかなげの水^み草^{くさ}の顛^{かぶ}へやまざるに心^{こゝ}臓^{ぞう}ゆ
るゝを時^じ々^々におぼえぬ

あわたゞし昨日も今日も君を見れど啞^おの
如くにわかれぬるかな

青^{あお}き毬^{たま}栗^りのひとつが落ちしのみ二百十日
は事もなかりき

わがことのやうに厄^{やく}日^びをおそれにし祖^お父^{はち}
は在^あらず空^{そら}のしづけさ

まづやかにさむれば青き幻のかの大空に
かへりぬるかな

くちなはの水を切りゆくすばやさをちら
と見しより心やぶれぬ

冬の土わがこゝろはたそこばくの荒びを
のこし一月に入る

落ちし葉はまめく土に朽ち去りぬ、林の
中は死せるが如し

硝子戸に見ゆるかなたの冬ざれの東京灣
の
高き帆ばしら

たそがれの落葉ふる野に身一つを放たれ
てある心地するかな

原中のたそがれがたに迷ひ來しわがさび
しさを問ふ人もなし

秋風は忙せはしき音にまぎらせてあまた碎き
ぬ無花果の實を

冬の日の晴れたる空の底ふかく潜みても
のおもふべきかな

空林のかなたの山の常磐樹の風に揺るゝ
を杳かにながむ

赭ちやけし林を今か出でむとし、こもる志
ばしの冬の日の色

霜月の木原のなかをうねくとはしる流
れの上の大空

バナ、など食べちらしたる盆の上に夜氣
冷やかに更くるを覺えぬ

原中の月夜はふけぬ、枯草に霜のむすぶを
見てかへりけり

晩秋の林の上の夕月を志づけきものにお
もひながめぬ

あかつきの秋の外面とのほの光はも洋燈らんぶの銀に
白くうかべり

遠き空しろくつゞき、志の、めの雲の何
處にか秋はうごけり

鳳仙花一むらはみな實となりぬ、汚れたる
葉に風わたるなり

秋の日は百日紅にたゞよへり、心次第に醒
むるをおぼゆ

初秋の風冷やかに吹くなべに身内の疲れ
いちじるきかな

桃の葉を背にして駄馬のうちつゞく日中
の街まちをわれも行くなり

ほとゝぎす山の火燃ゆる邊を去らずこの

高原たかばらは物の音ねもなし

夜氣やきすゞしとばかり門に出でゝ見る野は

はてしなく露つゆに潤うるはふ

雨空の夜となるほどをひぐらしの聲きえ

ゆきて樹々は黒めり

桃の葉は去なえり、中にひぐらしの影あら
はにも啼くをあはれむ

いぎたなく家の誰彼れ晝寝する中に眞夏
のあはれをおぼゆ

林よりかへれば脛に血ながれて少し痛む
を涼しとおもへり

極熱のひかりに萎えて青き葉の落つる音
なきかなしみを見る

七生村百草の山ときくからに都遠くも君
をおぼゆる

郊外は冬來ること早くして林を鳴らす風
の音かな

わが脚はおもし鉛を引く如く埃ほこりに白き河
岸通り行く

川やなぎ葭戸あけたる藝者屋に晝寝ひるいする
子を電車より見つ

枯草にむすべる霜のこまやかにまろく

つゞく冬を味はふ

雪の後に雨は來れり、夜の如き部屋のゆふ

べにもものをおもひぬ

春の日の光りあまねき原中を行くに額ひたひの

やゝにじみ來ぬ

離れゆく人の心のありさまを志づかにひ

とりおもひ見るかな

うれしくも見つる冬野の一すぢの水のほ
とりの水仙の色

なやましき春のゆふべを人々のかたらふ
聲のひゞきのみさく

酒冷ゆる海岸街かいがんまちの旅籠屋かきやに千鳥せんじうの聲をき
きて寝ねにけり

あらはなる枯野かよの石いしにわがこゝろ荒あむを
おぼえ涙なみだしにける

水仙を氷の花といひし人その青ざめし唇
をおもへる

夕されば人にも世にも倦みはてしこゝろ
やゝ生く、空のあかるみ

屋根の草霜ふり月のさる朝に枯れ伏した
るをあはれとぞ見る

何といふざわめきやうぞ枯草にあられた
ばしる志あひだばしが間

春の日のかげりあかるみする如きわが性
格のかげをおもひぬ

ゆるわかずとある小橋を^{てい}^{くわ}低徊し黄に濁る
日を見てかへりけり

君病むといふ日霞のやゝたちてものうき
鳥のこもり音をきく

加茂川や柳に雪のしろき日を^こ^{よん}胡粉とくら
む君しおもほゆ

青黒き木の葉を眺めわれたゞに涙す今日
の事はてにけり

白き蛇路みちをよぎりて草に入り草間を水の
如くはしれる

あゝかくて生くべき今日の日に入りぬ、眩まぶ
しかる陽ひに耳鳴りのする

六月の陽ひの色たゞに乾く見ゆ、潤ひもなき
頭のいたみかな

青草の中に野生のつゝじ花、一株つゝの白
きがのこる

黒きものわが眼を壓し、かゞやける強き日
かげに倒れむとしぬ

梅雨のに入るその日雨ふり、火の如き柘榴の
花も志めりてありぬ

君が住むゆふべの町の灯のかけ見ゆ、埃のに白
き風の中より

ひぐらしは志きれり、窓のがらす戸に露し
たゝれり目ざめたる時

水打ちて庭のたち木のよみがへるそのよ
ろこびを眺めつゝあり

樹の間より照りかゞやける夏の日の青き
野を見て林を行けり

燈のはづかありてふのみに蟲の翅のはた
はた鳴りて寝ねられぬかな

いつかわれ訪はざりしまに君が門の玉蜀黍は實となりにけり

夏の日の夾竹桃の青き葉の強き光りにこころさめぬる

初秋の空を仰げばわがこころうつるばかりの透明の色

風すでに秋なり、枕もたぐればあかつきの樹のざわぐと鳴る

旅人は停車場外の秋かぜに疲れし眼を志

ばたきけり

鬱とせる眞夏の林うちふるひあらしす空

にひるがへる青

風まじり志ばく微雨は戸を打てり黙し

て聽けばさびしかりける

青の村を今あづけし見れば青草はやに黄
を帯び秋となりけり

君が胸の死せるがごとく静かなるその平
面にわれは映りぬ

ものなべて安らに観るをえずなりぬわが
感情はそこなはれけり

小春日の麓の町の家々はわが目の下にあ
きらけく見ゆ

ひねもすの風に白けて遠き陽のさむき色
見つ大地を行く

霜むすぶ枯草原をふむ如くわが來し方は
さびしかりけり

菊嗅ぎてありつるほどのうら安さわがこ
のころになしと思ひぬ

しみぐと眼に沁む白き菊の上をおなじ
き色の風のわたれる

無花果の枯葉さわがせ風は去り風は來り
てなほ暮れずあり

さびしさに幹をけづれば蟲くひの生地あ
らはれぬあはれ無花果

代々木野の落葉の朝の味ひをたづねて君
が門に來りぬ

草の中孵りもはてぬ雛鳥はうごめきつゝ
もなほ生を欲る

ひぐらしや雨戸のひまに曙の色しろく
として眼に入り來る

青き草風に光れり濠端^{たうたん}を電車たえたる涼

しき月夜

葡萄^{ぶどう}蔓^{つる}の匍^はひたるまゝに土となりし山路
を春の夕ぐれにゆく

常磐樹を降りうづめたる雪の中にこもれ
る鳥の巢をおもひけり

齒の痛みよべの名残りの夢の如くつゞき

て今日もなやましきかな

腹立たしく、とつかは君を訪ひくれば障子を張りて餘念なきなり

枕もと、消さでありにし洋燈の火くらうまたき曉は來ぬ

こすもすの莖の青きに雨ふりて庭しとし
とと暮れてゆくなり

遠蛙おちあひ村の新田の水こえたりや夜
たゞ啼くなり

霜ふれば畑の花ぐさ枯れくくに影繪かげゑの如
く眼まなこに映りけれ

冷やかに露けき秋の夜の空を雲わたりゆ
くしづけさを見る

かくれ水みづ小野こののゆふべにうすあかり澤枯
梗えいてふ花のそよげる

九月末、秋高あきたかく々と底ひなき大空のもとに憩
ひてありけり

鐘とほし風蓬々とむさし野の林を鳴らし
年あけにけり

われもむかし母ありきてふ一すぢのその
あかるさをおもふ時あり

櫻草青じろき頬のわなくと春さむき野
の夕風にさく

わがこゝろ何か欲りする春の野に陽炎趁
ひて遠く來にけり

何しかも昨日の心われや趁ふ、椎の林の入
日つめたき

花見ゆる遠き林のたそがれの静けき影に
なみだしにけり

頭にのせし氷ぶくろの冷ひえを吸ふ悪血あくちの音
のかすかなるかな

霧の中、烟草吸ふ火のほのあかりわが前を
ゆく夜霧よがきりの野よ

躑躅さく岡の南の煉瓦塀、青む五月の日の
しづかなる

わが胸の中にひそめるものゝかけ芽ぶく
が如し土の底より

蚊のうなり精舎しやうじやの中のしづけさを揺うごかす
如くいとまなきかな

哀あはしくも夕日のいろの實ぞ落つる祖父おぢが
墓はかの一もと棗なつめ

秋を病む執ねきものゝまつはりてわが心

吸ふごとく寒けき

病むまくら、秋の蠅らの虻ばかり大きなる

来て無花果を食む

秋の晴、高ゆく鳥の三五羽の白きつばさの

遠くかすめる

あゝ、疲る、しばし手かけむ樹もあらぬあら

野はたゞに涯りもなく

連翹の垣に夕日のうすれゆくさま見てあ
りぬ、心はなれて

あねもねの薄むらさきの花びらに軽くた
だよふ夕づく日かな

うす暗き室むろのゆふべに堪へがたく、高き窓
より落つる日を見る

夜の雨にゑめる線路の石だ、み遠く照し
て電車は来る

さる夕べわが世の人はみな雲の彼方に遠
く去るとおもひぬ

ふるさとの春の入日をおもひつゝこの平
原のわか草に立つ

冬の花に山茶花ありといふことを心強く
も感じぬるかな

風ふけば森の雑木に巢をくへる一群白き
鳥はみな啼く

死せる犬またもわが眼にうかび來ぬ、かの

川ばたの夕ぐれの色

冬の日に野獸のむれのあらはなる林の中
を遠く望みぬ

霜おける屋根のかたへの山茶花の寒けき
色をあかつきに見る

裸木の霜とけそめて志づくする冬の初め
の午前の日かげ

初冬の午ひるちかき陽ひを仰ぎつゝ新あらたに生きむ
日をおもふかな

ほそぐときはまる路みちに迷まよひ來きぬ暖あたたかき
日ひを背せにうけつゝ

雲うわきぬわがさびしらの眼まなこに沁しみむ白しろなで
しこのうすら冷ひやたく

遠とほき世よへうつりゆくごとおもひでのやゝ
に薄うするゝ日ひの寂さびしけれ

野の秋の水のやうなるあけがたの大氣の
中にわれ立てりけり

秋の風遠よりきたる物の音のわが疑ひを
解くごときかな

とある家の垣の上なるくれなるの夾竹桃
の花のうつくし

花のやゝ強きかをりにうら安う寝る一と
きをさまされしかな

わがこゝろ氣遠くなりぬ、ひびくのときれ音ほ
のに消えゆくまゝに

文月のさる日のおもひふと胸にうかびい
でつゝ、淡くきえけり

秋の日や鳥の一むれゆきすぎて野は志づ
けさにまたかへりけれ

風の夜の戸のはためきに寝ねがたく、さみ
しく事の破滅をおもふ

秋ちかき青木が原を夕かぜに吹かれてひ
とり旅人は行く

むさし野のなごりをとある杉垣の尾花に
見つゝ涙おぼえぬ

かやぶきの屋根しとくと武藏野に家居いゝ
して聴くはじめての雨

松かぜは遠汽車の音を吹きなびけ雨來る
こと夜ふけぬるかな

疾き風は来る、大木の落葉はちゞに亂れて
空を打つなり

枯草に一もとまじる菊の黄のまぎれぬ色
をあはれみにけり

さら／＼と風に鳴りつゝわが前を楡の落
葉の走りゆくなり

いつしかに雑木林の風たえて冬近き日の
空はをぐらし

上^{うは}沓^{ぐつ}のあぶらじめりの蹠^{あなうち}に冷^{つめ}たき雨^{あめ}の夕^{ゆふ}
べなるかな

何となきものおどろきに人一人去^いなし、
如き胸のさびしさ

秋の晴^{はる}白^{はく}丁^{ちやう}ともがわが柩^か昇^あきゆくさまを
まのあたり見る

窓おせば西日^{せいじつ}うする、枯^かばやし過ぎにし
人をまたおもふかな

梅の花黒むゆふべにふと君がかなしき歌

の口にのぼれる

無花果の枯葉はたくのこり葉の裏戸を

打ちぬ木枯のあと

枯木立しらけたる野のあかつきに煙きえ

ゆく空をながめぬ

春の雨あづかにふれるあかつきの寝ざめ

の胸の柔かきかな

初夏の椎のわか葉の日に燃ゆる森を眺め
て窓によりけり

椎の花、青くさき香にちりしける森の日陰
をひとり歩める

野の夕ゆふにひとり残りしわれすらも消ゆる
が如くさびしかりける

もの見ればみな涙もつうつくしき女の眼まなこ
をおもふことあり

藤菜とや君が摘み來しわか草の中にまじ

らふ柔かき花

しけ臭き土藏のかげにかじけ咲く梅のひ

と木のたそがれの色

もち月のころをねがひて花さく夜、佛とな

りし祖父（以下六首、祖父を失ひて）をしぞおもふ

葬りの日、六十一の御賀にと植ゑし櫻のは

らぐちりぬ

野へおくり、晴はれよろこびしなき人にうらゝ
日なるがせめて嬉しき

御骨壺みねづか祖母おばがかたへに納めてしその夜春
雨しづやかにふる

今日幾日君が目かれて庭の木は春の落葉
のちげくもあるかな

ふと見れば庭の片隅さゝ草のこもみかた
みと露けさに居り

今日の日に入りしを知らずうら安きあか
つき起きの鯛ひらしの音ねよ

川べりに水を眺むるうしろつき、浴衣ゆかたの白しろ
の暮れずありけり

南風今日も吹くなり重き頭づをかへてう
つら君が瞳めおもふ

ものわすれしたるおもひにこの一日ひとひ何す
ともなくあり經ぬるかな

春今し逝くてふたのかなしみに涙さしく
み雲を眺めぬ

草に寝てさむれば遠く鳥が音のかすみの
中に消え去りにける

かたくなにとけぬ地のかげ、春くればいふ
がひもなく空に青みぬ

とある草、ひと莖つめば一莖の小野の春こ
そをかしかりけれ

春の草なよやかなるにうら若き男をんな
のむらく寝たる

夢の如き煙の色のほのくと湖畔こぼの家の
あかつきに見ゆ

何ものもたのまず心ひたすらに水のやう
なるあめつちを行く

乾きたる土につめたく響きくる落葉の音
の哀しきゆふべ

晴れし日の霜とけ路にふみまよひなほ門
遠き君をおもひぬ

日くれがた、疲れはてたる身を起し遠く新
樹のそよげるを見ぬ

わがこゝろ絶えず搖うごきぬ何としもわかぬ
歎きを感じけるまゝ

春夏の往きかふ空を見てあればうすき緑
のたえず流れぬ

春の雨音なく降り、かゝる夜は君をおも
ふにうら安きかな

わが家につゞく家並は薄雪の如くも春の
月さしにけり

祖父よ今いづこいかにとおもふ時、忌の百
日はとみに來りぬ

そぼくと雨ふる中におん忌の百日はあ

けぬ萱草の花

人の生の旅に倦みては母が胸のふるさと
遠く戀ひわたるかな

わがいのち死ぬばかりなる衰へを解きえ
ぬ如く五月は來る

椿の葉しとくくれの雨うけて小窓のう
ちはものゝあやなし

君もなくわれもなかりし世に遠くかへら
むとして霧の迫れる

見てあれば遠野の雲はおもむろに動き出
でけり静かなる日よ

枯草に雨横走る垣の外とのゆふ野はるく
暮れわたりけり

罇ひび入りし白磁の皿の紅いちごのこりて卓
に燈ひのあかきかな

ストーヴの室のぬくみに常磐木の雪の白
きをたゞに眺むる

ふと風の青草あなごわたる志づけさに心うるほ
ひたそがれにける

野を來れば蟲のこゑして月かげはかなし
く秋の光はなてり

書くものはみな書きをへて冬の日の暮る
るに間あり雪の降りくる

みぞれふる春寒き夜のともしびのかげ微
かにも花のにはへる

天あめが下、青葉しにけり人みなは衣きぬ更へにけり
新なる日よ

初春の風あたゝかう、わか草にうすくつみ
たる雪をわたれり

曇り日の青黒の葉をさと照らし日は一し
きり輝きにける

朝顔の垣根を鳥の越えゆけるのみに過ぎ
ざる景色なりけり

女郎花おほかる小野の一すぢの路ほのか
にも村につゞきぬ

霜の朝遠居る人のおもかげを切におぼえ
て心いためり

クリスマス、その日の霜のいちじるくもの

清淨の朝の地の色

冬の夜の街は寝に就き、ともしびの少なき
影も消え去りにけり

目のかぎり、さ青の麥の穂の色に空あかる
みて夕べとなれり

水無月に入る日青葉に白きもの、ちらとか
げして消えにけるかな

わが倚れる森もつゝみてはてしらぬ濃霧^ニ
の中に日のおぼろなる

まみくくと月の光のあかるさをましろき
雪の上に眺めぬ

夏帽子、冷やく風ひの吹きなぶるたそがれ
方の町は灯ひもせず

今朝も雨あめ晏あそく起きたる頭の痛みおぼえて
あばし柱によりぬ

山中やまなかの秋のゆふべのさみしさに音なく霧
のこめきたるかな

をちかたの丘のひと木の晴れくもり見れ
どもあかず秋の心の

秋高き一樹じゆのおよそ中ほどの空に雲あり
動かざりけり

驢馬たえずけだるげに嘶なくひと棟に窓は
むかへり秋風の吹く

君がりの一路ちよ香ばうかに晴れわたるはての遠

山、烟あがれり

雲しきりに動くと見つゝ野をあゆむ夕べ

なりけり風、空そらを行く

熟れすぎて荔枝れいしの中の赤き實はほたく
ちれり十月の日に

たそがれの障子に黄なる日の色をまよた眺おも
くもるばし見しかな

秋風に心そゝられあたふたと出づれば空
に白き雲あり

一ひとかたまり野にうごめくは驢馬ろまなりき口

笛吹けば皆こなた見る

黄なる葉に透きとほりたる織維せんひ見せ軽く
落ちきぬ午後の日のこと

秋ふけて唐桐たうきりの花ちらすあるを見つゝ涙
のもよほさるゝかな

窓あけて先づ見る丘の高き家の屋根に霜
なき朝はさびしく

新しきさびしみをしも覚えつゝ春淺き野
のわか草をふむ

重き頭を懈たろくよせたるゆふべの戸風なし、
山に霧するが見ゆ

あかつきの雨戸に匍はへる野の霧の戸を繰
るまゝに襲いひ來るかな

林なす櫛はじの紅葉に夕映ゆふゆるあかるき野べ
をさまよひにける

乾反葉ひざりの五六片ひらほど、からくと風かぜに鳴り
つゝも枝えだにありけり

大いなる雪崩を背に受くとだにおぼえぬ
如く卒倒れぬるかな

遠鳥のつばさの音をきゝさして覺めぬわ
れはた生命ありけり

死といふこと難しとのみはおもほえず風
やすらかに胸にかよひて

茫として今日もあり經ぬ卒倒れたる後の
こゝろを傷むともなく

木がらしと外わたる風の志るき時わりな
く涙こぼれけるかな

一とせを逢はぬ心地といひやれば飛ぶが
如くも來べしとおもふに

枯草に雨しとくくとくる、日はわが世ふ
りぬるこゝちこそすれ

ふけぬるか武蔵野を揺る木がらしに雑木
林はおらび叫びぬ

一聯いっれんの珠たま相あふるゝひゞきしてこのあかつ
きにさか鯛うしほのなく

雲高う飛ぶ白鳥しらとりの羽はの光り、秋來ぬとしも
眼に沁みにけり

秋の潮、夜ふけてきけば君遠くさすらひ來
にし旅をしぞおもふ

くもりたる夕べの空の一ところ、あかるき
方に眼をおくりぬる

無花果や、うら戸あくれば、るみわれて、ほた
ほた落ちぬ、静かなるかな

井のほとり、栗の枯葉の落ちちれるさびし
き音のひまなき夕

澤枯梗ほのかのすがた目にとまり、心のあ
らびあづまり初めぬ

雨の音をきゝつゝ、今日も君を見ず、心むな
しく夜となりけり

ほそ／＼と蟲は啼くなり、かくてこのふけ

ゆく夜の堪へがたきかな

片隅に凍る雪あり春の日に黒ずみてなほ

小さくのこれり

雪の中一すぢくろき烟突のけむりの色を
近くながむる

この野への雪夜をかしく、そことなくまし
ろき橋のほとりまで来ぬ

もの足れりされども心なほ悶ゆわが生涯
のさびしき時か

竹やぶの中にうごめくものゝかげ人の如
くも月のしにげり

森かげの雪のあとなるぬかるみに騎馬つ
づき行く後をたどりぬ

屋根の雪やゝにまづくし垂氷たるひする氷の色
と白壁の色

河岸がし通り雪夜ゆきよしづかに苦船くせんのまだらに白
くふけわたりけり

よくうたふ鶯うすものにおどろきてこもる縁
の椿つばきにかくる

春は來ぬ、そむきし人の媚こぼれつくり遠笑とほえみ見す
るさまのおぼゆる

昨きのうの夜の夢ゆめにやつれし君きみを見て涕なみだながし
ぬ、なみだ頬ほにあり

燭ともしびをともすと起たちて白しろき手の雛ひなの肩かたにや
はくふれける

金の筐はこ來こん一ひととせを安やす寝いせむ雛ひなの君きみにわ
かれを申まをす

椿つばきの花はな白しろ砂すなの山やまにちからある色いろとこそに
ほへ春はるの夕ゆふばえ

からたちの花はな白しろしてふ記き憶いより月つき夜よを來く
れどわかざりしかな

飲めといひ飲まずば打ちもかねまじき怖こは
き人より酒をおぼえぬ

酒はよし、酔よへばちひさきものすて、廣き
世界にわれをおきける

とはいへとたゞにわれなく酔よひもえず、生
くてふ大事だいじ背後うしろにあれば

酒さめてさむけき心こともなく暮れゆけ
る日に志こころばし對しぬ

潮けぶる棧橋の上に友はその眼鏡くもら
し戀をかたりぬ

はやり唄すたれしふしをよくうたふ島の
藝妓の軽きあはれさ

おごそかに眺め來りし山のさまけちかく
對しさびしうなりぬ

したしまずなりぬと初夏を観たる時いふ
ばかりなくこゝろ哀しき

すがれたる躑躅に雨のそぼふるを見つゝ
われはも家の戀しき

桐の花そのむらさきが落ちちれり、さる路
傍の雨後の濕りに

初夏の葉廣がしはの青の色、見つゝ、暁の青
きをおぼゆ

つゞく夜の不眠に人は酔へること、帽もか
ぶらず夏の日を行く

その白紙白きを忌みて縦横に塗抹す、心な
にかやすけし

濁りたる流れに月のかげはしてわが踏む
橋のをぐらかりける

わが道はひらけぬ、遠き野木見れば六月の
日の青う霞めり

夏帽子青の樹の間に遠く見てこの川岸を
さまよひにける

いかにして生いくべきかてふ問題を考ふる
べく大人おとなになりぬ

君飢ゑむ、かくおもふ時ひしとわがけだる
き心とりなほすかな

生いくといふこの一語には千百の歎きかな
しみこもりてぞある

まどろめどむなしき夢のさめやすく、この
ころものゝはかなかりけり

郊外の歳暮はさびし、冬ざれのいたましき
中に人は黙もだせり

雪いつか雨となりけらし、さす傘の柄漏もり
のしづく冷つるたかりけり

ある時はあさましきこともおもひみぬ、老
いたる人の安らけき胸

秋の潮、磯松が根の舟ゆりて遠くかへりぬ、
わがこゝろなく

ひぐらしよ、汝^ながありあけの清き音にめざ
めぬ人はあらしとぞおもふ

柿の葉に月の光のうす白く次第に朝のあ
けわたるかな

わがこゝろ烟の如きむらくゝのもの吐く
方にうつりゆきけり

とよめける歳暮の街^{まち}の人通りとだえし時
を木がらしの見ゆ

くれなるに山茶花さけり、ぼうくと木枯
わたる野中の家に

雪霽れし入日の空のあかるきに、遠くも君
をおもひわたりぬ

枯木立つらゝに光る日の色を見つゝし居
れば心うるほふ

御祭りの日はおごそかにうらゝかに、冬の
日かげの暖かきかな（師の五年祭に）

北國きたくにのうす濁りたる日の色の中に林檎の
くれなるの濃こき

林檎の樹、日のしたりの果みとなりて甘き
色あり寒き香を吐く

五月さつきかぜ汝なが歡喜よろこびの笑みごろの生きよと
われにおとづれて來ぬ

強き風に軒をなだるゝ雪の音のまぎれず
胸に沁みとほるかな

終電車青き燈ともる中に居て巷の風をし
づかにきゝぬ

その青き燈のもとにさめもせず寝もせて
何かものをおもへり

あさましく溝に浸れる荷駄馬の開きたる
眼に涙たまれり

凍てし土杖をたつれば春の氣のほのかに
上ることく感ずる

秋かぜに都に入れる友の顔三人ひとしく
蒼あはざめてける

枇杷の葉の長く青きにわがうれひまつは
るとしぬとある夕べに

月空にのこれり露のしろくと野の何處
にもおきわたるかな

人去りてしらせし室しむのたゞ中に洋燈ちんぶの臺たい
の黒く冷つたし

初春の日に照らされて裸木の梢かすかに
うるほへる見ゆ

椿の葉なめらかなるに、初春の日は柔らかに
軽くうかべり

冬の日のをぐらき夕ゆふの室内の死せるが如
きものゝ色かな

一すちの吹雪にけぶる路遠く、更くる夜に
見ておもひ哀しむ

灯ひのあかき教會堂けうかいどうの見えそめて雪夜ゆきよの路
のはかどりにける

樹の皮にまだらにたまる雪融けてあづく
の色のあたゝかきかな

海の香にこゝろ渴かわきて寝ねし夜に君が夢
こそかよひ來にけれ

春の雪しとく來り去とくと消えゆく
夜よるのあはれ味はふ

一月の温泉の山のあかつきに湯氣の色見
て街にくだりぬ

雪ふかくこもれる家の灯を橋の上より見
て過ぎにけり

草青む春のはじめの日のかけに開けたる
野の末は霞みぬ

新しき天地に面むけし如きこゝろゆく日
の春にあひける

畢

明治四十三年三月十五日發行
明治四十三年三月十五日發行

覺めたる歌
(實價金四拾錢)



著作者 金子 薰 園

發行者 東京市日本橋區通四丁目五番地
和田 靜 子

印刷者 東京市京橋區南小田原町二丁目九番地
中野 鐵 太郎

印刷所 東京市芝區愛宕町三丁目二番地
東洋印刷株式會社

發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地
春陽堂
電話本局五一番
振替口座東京一六一七

類書歌、句俳、詩體新

<p>著氏董泣</p> <p>二十五絃</p> <p>送料金八錢</p> <p>實價金壹圓</p>	<p>撰氏綱信</p> <p>歌集玉琴</p> <p>送料金六錢</p> <p>實價金五拾五錢</p>
<p>著氏涯無</p> <p>すいかつら</p> <p>送料金六錢</p> <p>實價金七拾錢</p>	<p>著氏村藤</p> <p>夏草</p> <p>送料金四錢</p> <p>實價金參拾錢</p>

行發堂陽春

類書歌、句俳、詩體新

<p>著氏外鷗</p> <p>うた日記</p> <p>送料金八錢</p> <p>實價壹圓八拾錢</p>	<p>著氏伴露</p> <p>心のあと</p> <p>出廬</p> <p>送料金八錢</p> <p>實價金八拾錢</p>
<p>著氏村藤</p> <p>藤村詩集</p> <p>送料金八錢</p> <p>定價金八拾錢</p>	<p>著氏伴鶴</p> <p>出廬抄註</p> <p>送料金六錢</p> <p>實價金參拾五錢</p>

行發堂陽春

新體詩、俳句、歌書類

和風氏著	和風氏著
俳家逸話	俳諧研究
送料金六錢 實價金四拾錢	送料金八錢 實價金六拾錢
和風氏著	和風氏著
閨秀俳句集	戀愛俳句集
送料金四錢 實價金四拾錢	送料金四錢 實價金參拾五錢

春陽堂發行

新體詩、俳句、歌書類

博士著	酒竹氏著
皇國ぶり	鬼貫全集
送料金四錢 實價金八拾錢	送料金八錢 實價金五拾錢
野口氏著	酒竹氏著
英詩夏雲	與謝蕪村
送料金四錢 實價金七拾五錢	送料金八錢 實價金參拾錢

春陽堂發行

新體詩、俳句、歌、書類

文學雜誌

新小説

每月一回發行

送料金貳錢五厘

實價金貳拾五錢

松宇氏著

中興俳諧

五傑集

上下

送料各四錢

實價各貳拾五錢

春陽堂

圖書目錄

(非賣品)

往復はがきにて御申越次第送呈

每月發行

原稿用紙

中形百枚拾貳錢
小形百枚拾貳錢

送料金四錢

中形百枚十五錢

春陽堂發行

明倫彙編
家範典
卷之四
十一